

事後評価報告書（日中（MOST）研究交流「気候変動」）

1. 研究課題名：「青海・チベット・モンゴル高原における草原生態系の炭素動態と気候変動に関する統合的評価と予測」

2. 研究代表者名：

2-1. 日本側研究代表者： 国立環境研究所 主任研究員 唐 艶鴻

2-2. 中国側研究代表者： 北京大学 都市と環境学院 教授 ホウ センウン

3. 総合評価：（ A ）

4. 事後評価結果

(1) 研究成果の評価について

本課題では、炭素動態の解明などの現地調査・観測に基づく研究とモデル研究を適切にリンクして総合的な研究が行われている。また、2001年および2006年からの継続的に実施されてきた研究成果を生かし、長期時系列データや知見などを活用した研究成果が得られており、当該分野の研究発展に貢献できたことは評価できる。特に、中国側研究者の協力により、中国の中でもチベットという外国人の活動が比較的厳しく制限されている地域での調査・観測が実現されたこと、標高に伴う炭素動態と環境要因に関する研究を推進したことは高く評価できる。

一方、異なる気候変動シナリオでの炭素動態の予測研究が遅れたこと、当初の研究目的にあった炭素管理や温暖化政策に対する提言が研究終了報告書になされなかったのは残念である。

今後、本研究交流の成果を生かし、新たな実施が予定されている環境省研究プロジェクトでの継続的な研究成果に期待したい。

(2) 交流成果の評価について

日本側と中国側を合わせ、延べ出張日数が約400人・日と数多くの日中研究交流を精力的に実施することにより、幅広い人的ネットワークの構築と相互理解ができたこと、若手研究者を含む研究交流が推進されたことは大きな成果と言える。特に、大学関係者との交流を強化するなど、人的交流促進の展開がなされたことによる効果は評価できる。

(3) その他（研究体制、成果の発表、成果の展開等）

日中研究者による共著論文が22報、両国研究者連名による学会発表が20報と数多くあり、高く評価できる。また、本課題の研究代表者から提出された研究終了報告書は、事後評価委員に研究交流内容を伝えようとする意志が感じられる点で優れている。